
思いが重なり、笑顔をつなぐ。

松の慎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

思いが重なり、笑顔をつなぐ。

【Nコード】

N4391B

【作者名】

松の慎

【あらすじ】

両思いだったけど、2人は付き合わなかった。そして卒業式を迎え、いつしか高2になったとき2人は再び出会った。「一緒に幸せになろうね」大好きだった人との過去は悲しいもので、たくさん後悔した。けど、今度は君が幸せになることを願おう。僕は、私は、君の笑顔が大好きでした。だから、心を込めてありがとう。

「じゃあ若菜はどんな方法で告白されたことある？」

「んー・・・手紙にメール、直接。あと・・・」

言葉が止まる。

その先を言うのを不意にためらってしまった。

「あと？」

一度目を深く閉じ、息を飲んで答える。

「友達づたいかな・・・」

恋バナ大好きのアタシの友達、真佐美に聞かれ、ついつい思い出してしまう。

よく人間は嫌な記憶は心の奥に閉じ込めてしまうように、アタシもちょっとだけ切なく悲しい記憶を隠していたの。

だって今思えば本当になんでそんなことしてしまったんだろうって後悔してしまうから。

そんな思いをしないようにするために、思い出して切なくさせないように封印した。

今高2のアタシにとってはちょうど2年前のこと。

そう、あれは受験をひかえた中3の冬のことだった。

『りっちゃん、まーたシイタケ残してる！』

『若菜こそニンジン残してるだろ』

席が前後で、ご飯食べるときは班になって食べていたから、班のみんなで机をあわせるとあたしとりっちゃんは隣同士になる。あたしたちはお互い嫌いな食べ物を把握していた。

『じゃー交渉成立ねっ』

だからあたしの嫌いなものはりっちゃんが、りっちゃんの嫌いなものはあたしが食べていた。

ちようどあたしたちの嫌いなものと食べれるものが反対だったんだ。

そんな関係だった。

本名、律はあたしの好きな人。

一緒にいると心がなごんで、つい笑顔になってしまう。

でもたぶんそれはあたしが彼に恋してるからなんだろうけれど。

あたしはりっちゃんを好きなことを、仲の良い渚に話した。

といより、渚がしつこく聞いてきたからつい言ってしまっただけだけど。

でも誰かに聞いてもらうのはとてもスッキリするし、心強い。

すると翌日、渚は言った。

『昨日のあれあるじゃん？りっちゃんに言っちゃった』

『は?!なんでっ・・・』

『まあまあ落ち着いてよ。そしたらりっちゃんさ、最近若菜のこと気になってるらしいよ』

あたしは渚のその言葉が信用できなかった。

本当にりっちゃんがあたしのことを気にしてくれてるなんて思えなかった。

しかも渚がりっちゃんにあたしがりっちゃんを好きなことを言ってしまったから、りっちゃんと気まずくてずっと話せないでいた。給食の時間も、りっちゃんの顔を見ると赤くなってしまいそうだったからわざとそっちの方を見ないようにした。

そして掃除の時間。

『ねー若菜、なんでりっちゃん避けてるの？』

『あんたが言っちゃったからでしょー！ 恥ずかしくて話せないっての』

『でもりっちゃんだって若菜のこと好きだよー。付き合ってたって』

『嘘だー』

『ほんとだって。さっき言ってたもん』

あたしは渚の言葉が信じられなかったわけじゃない。

恥ずかしかっただけなんだ。

けれど、あたしは結局うんと言えずに、もう良いよと言ってしまった。

本当にりっちゃんはあたしのことを好きだったんだろうか。

今でもそれは謎。

けど、たぶん本当のことなんだろう。

だからすごく後悔してるんだ。

うんと言って、りっちゃんと付き合わなかったことを。

数日して、やっとりっちゃんとともに話せるようになった。

もうあの話は全くなかった。

お互い出さないようにしていたんだ。

『もーすぐ受験だねえ』

『そーだね。若菜はもう書き終わった？自己PR』

『もち☆あたしにはバレーという味方がいるからね（笑）』

『いいなあ、なにか出来る人は』

『りっちゃんだってバスケ部じゃん？それ書けば良いんだよー』

もうりっちゃんの知らないものなんかないぞって感じだった。

誕生日や好きな歌手、歌、割といろんなことを知っていた。

あたしと同じ高校に行くんだってことも知っていた。

けど、それはいつしかあたしの思い込みでしかなくなってしまっていた。

『ちょい見せてみ』

『あっ！』

声に出してとめようとするりっちゃんを押しつけて、あたしはりっちゃんの自己PRを見ようとした。

不意に受験票に目がいった。

目を丸くして疑った。

『K・・・高？りっちゃんK高なの？』

『うん・・・』

『そ、そうなんだ・・・』

同じ高校だと思っていたけど、りっちゃんはいつの間にか志望校を変えていた。

けどあたしはりっちゃんに、どうして？とは聞けなかった。

どうりで今まで志望理由書とかも見せてくれなかったわけだ。

ようやく理解した。

結局好きであることは伝わったのに、思われてるって分かったの

に、なんでこんなにも遠く感じるんだろう。
なんでも分かるって言っておきながら、一番大切なこと分かっていなかった。

そして迎えた卒業式。

なにも変わることなく、なにをするでもなく卒業する日を迎える。

卒業証書をもらっても、在校生からの言葉を聞いても泣けなかった。

『ねえりっちゃん、写真撮ろー？』

『うん』

近くにいる人にシャッターを押してもらおうよう頼む。

快く引き受けてくれたので、あたしたちはピースをした。

カシャ・・・と、音が周りに響きわたる。

『じゃありっちゃん、ばいばい！』

『うん、ばいばい若菜』

卒業式中、泣けなかった。

けど、記念にりっちゃんと写真を撮って、手を振って別れたとき涙が出そうになった。

これで最後なんだと思うと悲しくて、辛くて切なかった。

けど自分の口から好きだと伝える勇氣もなく、そのまま別れるを得なかった。

高校入ってからちょっとだけメールをしたけど、それもほんの数日。
今となってはもう全然音沙汰なし。

近隣高と言っても、やっぱりなかなか会えるものでもない。

世間は狭いって言うけど、あたしにとっては広いよ。

この上なく、広い。

「あ、そろそろ部活行こうよ真佐美」

「そうだね。もうそんな時間か」

荷物を持って体育館へ向かった。

やっぱりあたしはバレー部。

体育館に向かって歩いていっていると、思い出したように真佐美が言った。

「そういえば今日うちの学校でテニスの試合あるんだって」

「へえ。そうりでにぎやかなわけだ」

はっとした。

テニス・・・そういえば、りっちゃん高校に入ってからテニス部に入ったって言ってた。

「それってどこが来てるの？」

「さあ・・・近隣のどこじゃない？」

もしかしたらりっちゃんがいるかもしれない。

りっちゃんに会えるかもしれない。

そう思うと胸が躍った。

体育館について着替え終わる。

まだ部活は始まらないから、真佐美と一緒に窓の外を眺めてた。すると、どこかの学校のテニス部がアップをしていた。

真佐美とどこだろうねって言いながら、見ていた。

目をこすってよく見てみると、背中にはK高と書いてある。

「嘘・・・ほんとに？」

あたしは凝視しながらK高テニス部を見渡す。
りっちゃんがいるかもしれない、そんな淡い期待をして探した。

「あっ！」

そしてようやく見つけた。

K高のジャージを着て、軽く走ってるりっちゃんの姿。

どれくらいぶりなんだろう。

たぶん卒業式以来じゃないだろうか。

「りっちゃん！」

あたしは叫びながら手を振った。

するとりっちゃんはあたしの方を振り向いた。

あっ、というような顔をして、でもあたしに手を振ってくれた。

たぶんアップ中だから、あたしの名前を呼んだり「久しぶり」なんていうような言葉を言うのは怒られるだろうから、声に出せなかったんだろう。

それでも嬉しかった。

「頑張ってー！」

あたしがそう言うと、かすかにうなずいてくれた。

何年経ってるとか高校が違うとか関係ない。
好きだ。

その姿を見た瞬間そう思えてならなかった。
好きだ。
好きなんだ。

「律、さっき手振ってたの知り合い？」

「うん。中学のとき・・・」

「とき？」

アップが終わって試合の準備をするとき、滝に話しかけられた。
俺はラケットをケースから出して答える。

「中学のとき好きだった人なんだ・・・」

懐かしいな、もう2年前になるのか。

好きになったのはちょうどこの季節のことだった。

ばか元気で明るい若菜に惹かれてた。

渚が言うには若菜も俺が好きだと。

けど結局どうなることもなく、そのまま日ばかりが過ぎていった。
そしてついに卒業。

『ねえりっちゃん、写真撮ろー？』

『うん』

それが、俺と若菜の最後の思い出。

高校を離れて会うこともなくなってだんだん記憶は思い出になって
いっていた。

若菜とのことも、まるで元々なかったかのように心の奥に閉ざされ

ていた。

けど今日、また若菜に会えた。

「片思いだったわけ？」

「いや、両思い」

「は？じゃあ付き合ってたんだろ？なんで元カノって言わないんだ？」

「付き合ってたなかったんだよ」

俺に手を振ってくれた若菜は相変わらずだった。

昔と同じように笑顔を振りまいて元気いっぱいの子。
俺が好きになったときとまったく変わってない。

その声でりっちゃんと呼んでくれたとき、若菜に会えたとき、本当に嬉しかった。

だから俺も手を振って答えた。

「両思いなのに付き合ってたのかよー。変なの」

滝は首をかしげて言った。

変でも、それが俺らだったから仕方ないだろ。

そう思ったけど、言わなかった。

結局は直接言わなかった俺だって悪いんだ。

「今でも好きなの？」

若菜を見たとき、いろんな感情が溢れてきた。
嬉しさや懐かしさ。

ああ、やっぱり好きだ・・・って。

好きだけど、たぶんそれはもう昔のこと。

好きだったって言った方が正しいんだろう。

好きだった頃の記憶が一瞬にして出てきたものだから、そう感じだ
んだろう。

そうであってほしいんだ。

もう、終わったことなんだ。俺たちの恋は。

きつと若菜はこの高校で好きな奴つくってるだろうし、彼氏もいる
かもしれない。

俺の知らないところで新しい生活をしてるんだ。

「さあね」

そう思うと悲しいけど、でも微笑ましかった。

若菜が幸せならそれで良い。

若菜が笑ってってくれるんだったらなんでも良い。

望むことはただ1つだけ。

若菜にとって最高の幸せが訪れますように。

卒業してから、会えなくなってから、ただそれだけを願った。

俺にはできないことで、見守ることもできないけど、でもそれでも
昔好きだったって気持ちは嘘じゃないってことを忘れないためにも
願うんだ。

もしまたどこかで会ったら笑顔で俺の名前を呼んでくれるだろうか。
今はただ、仲の良い友達として存在してたんならそれで良いって思
えるんだ。

若菜にとって必要な存在だったって言うてもらえるだけで良い。

若菜が新しい生活をするように、俺も始める。
若菜だってきつと願ってしてくれるに違いないんだ。
俺の幸せ。

だから、心をこめてありがとう。

「若菜の知り合い？」

「そう。中学のときのね」

「仲良さげじゃない。元彼とか？」

「んーちよつと違うかな」

彼氏にはならなかった。

けれど、あたしたちは両思いだった。

そう、好きだったのはもう昔のこと。

今は・・・違う。

懐かしさと昔の愛しさはこみ上げてくるけれど、好きだったんだっ
て思い出すけど、今でも全く未練が残ってないって言ったら嘘にな
るけど、でも、夢だったんだ。

『どうして最後の最後まで言えなかったんだろう・・・』

卒業したあの日、最後に感じた悔しさ。

自分の勇気のなさの後悔の渦で埋まっていたあたしは、もう会えない
彼に心の中で誓った。

今度会うときは笑顔で。

あのときは・・・って笑いあえたら良いね。

いつまでもずっと思ってるんじゃないくて、今度はりっちゃんを幸せを掴むのを望む。

あたしとりっちゃんはだめだったけど、いつかりっちゃんにもまた好きな人ができて彼女ができれば、そのときはあたしも一緒に喜びたい。

ずっとそう思ってた。

そして今日、りっちゃんに久しぶりに会えたあたしは笑顔だった。

「わかった！片思いだ」

「残念。両思いです」

「えー？だって付き合ってたんでしょ？」

「うん」

真佐美はわけがわからないという顔をした。

あたしはそんな真佐美を見てニッと笑った。

そんなあたしに真佐美は言う。

「今でも？」

好きじゃないって言ったら嘘になる。

けど、好きだって言っても嘘になるの。

そんな淡い気持ちも大切だって思えた。

「さーねっ」

あたしが夢見てたこと、少しだけ叶った。

あたしの笑顔の上に、あなたの笑顔。
楽しかった日々を思い出させる。

あたしはあたしの中学時代が大好きよ。
あなたがいたあの冬が、一番好き。

あたしはあなたからたくさん素敵なものをもらった。

あなたがあたしを呼ぶ声、あなたと競った学年末テスト、盛り上がった話題。

数え切れないほど。

そして、笑顔。

「真佐美っ、どうせまだ練習始まんないでしょ？ちょっとテニス見ようよ」

「良いよ」

あたしと真佐美は靴を履いて外にでる。

試合というだけあって、たくさんの人がいる。

無理やり人ごみの中をわけあって、ようやく試合が見える位置まで来た。

「あ、うちの学校K高とやってるじゃん。あれーしかもあの人じゃない？ほら、さっきの」

「ほんとだ」

よく見ると、確かにそれはりっちゃん。

そういえばあたしりっちゃんのテニスってはじめて見る。

あたしはその光景に目が釘付けになった。

激しい打ち合い。

パコン、パコンとボールを打つ音があたしの耳に響く。

試合が終わりに近づくにつれ、その音はあたしの中で記憶を取り巻く。

りっちゃんが打ったびに、その記憶があふれ出る。

『りっちゃん、まーたシイタケ残してる！』

『若菜こそニンジン残してるだろ』

あたし、今ニンジン食べられるようになったんだよ。
りっちゃんに見せてあげたかったな。

『昨日新しいチョコ見つけたんだ。一緒に食べよ！』

『げ。俺も同じの買ってきたよ』

『うそっ』

あのときは頑張って2つを食べたよね。

次の授業に遅れそうだった。

すごい急いでほおばったのを覚えてるよ。

『今日部活に顔出すんだって？』

『うん。久々にバレーやりたいなって思っ』

『俺もたまには顔出すかなー』

バレー部主将のあたしと、バスケット部副主将のあなた。
お互いそんな性格じゃないのにねって笑ったよね。

『K・・・高？りっちゃんK高なの？』

『うん・・・』

『そ、そうなんだ・・・』

このときは本当に驚いたよ。
同じ高校とばかり思ってたから余計にね。

ここまでの記憶が出てきたってことは、やっぱり最後はあの記憶に
違いない。

あたしは周りで応援してる人の誰よりも一番大きな声で叫んだ。

「りっちゃん！負けるなー！！」

たぶん、これが最初で最後の応援。

りっちゃんはちらっとこっちを見て、ニッと笑った。

「まかせろよ！」

いつからそんなに頼もしくなったのだろう。

愛しい人。

頑張って、どうか、頑張って。

『ねえりっちゃん、写真撮ろー？』

『うん』

あたしも頑張る。

『じゃありっちゃん、ばいばい！』

『うん、ばいばい若菜』

最後の記憶とともに、試合が終わる。

あたしは小声でナイスファイトと言って、真佐美と一緒にその場を
去った。

もう後ろを見ないよ。

見たらまたきつと愛しく思えてしまうから。

あたしもこれでようやく一歩進めるよ。

やっと後悔した過去を思い出にできる。

今度会うときは、さらに笑いあえることを願ってる。

最高の友達として隣に立てたら良いよね。

「一緒に幸せになろうね」

りっちゃんもきつとそう思ってたくれる。

あたしには分かる。

今日あたしが幸せであるために、明日あなたが幸せになるために。

あたしたちは、過去を乗り越え

笑顔をつないだ。

f i n

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4391b/>

思いが重なり、笑顔をつなぐ。

2010年10月26日09時30分発行